

# ほけかんだより

HOKEKAN DAYORI  
Health science center

## 肝硬変は治る!?

大分大学保健管理センター所長・教授  
寺尾 英夫

一般的に慢性肝炎は10年から数10年の経過で肝硬変へと進展する。肝硬変は肝臓病の終末ステージと考えられ、不治の病と云われていた。しかし近年慢性の肝臓病の原因が明らかになり、その原因を排除することにより、たとえ肝硬変に進展していても治るのではないかとわれ始めた。専門用語で言えば「肝硬変は非可逆性(元には戻らない)」といわれた時代から「肝硬変は可逆性」と言われる時代になりつつある。

### 正常から慢性肝炎・肝硬変の ミクロ所見と血小板・発がんとの関係

	正常	慢性肝炎		肝硬変	
肝硬変のステージ					
血小板	約20万	18万	15万	13万	10万以下
肝細胞がん発生確率		低い		やや高い	高い

※肝硬変のステージの絵は顕微鏡でみた肝病変。黒い部分が線維化、白い部分は肝細胞群



### 肝硬変の病態

- ①持続的な肝細胞の破壊が起こり、その破壊された所に線維が出現・進展し結節状になるのが肝硬変である。肝細胞の破壊による数の減少は肝臓の働きの低下となる。
  - ②肝臓の線維化により硬くなり、肝臓に流入する門脈を圧迫してしまう。そのため門脈血は食道の方へ逃げて食道静脈瘤ができる。これが破裂すると致命傷になることもある。
- 肝硬変の原因の主なものを挙げると①B型肝炎ウイルス②C型肝炎ウイルス③アルコール性④自己免疫性⑤非アルコール性脂肪性肝炎、等々であるが約8割は①と②の肝炎ウイルスによるものである。

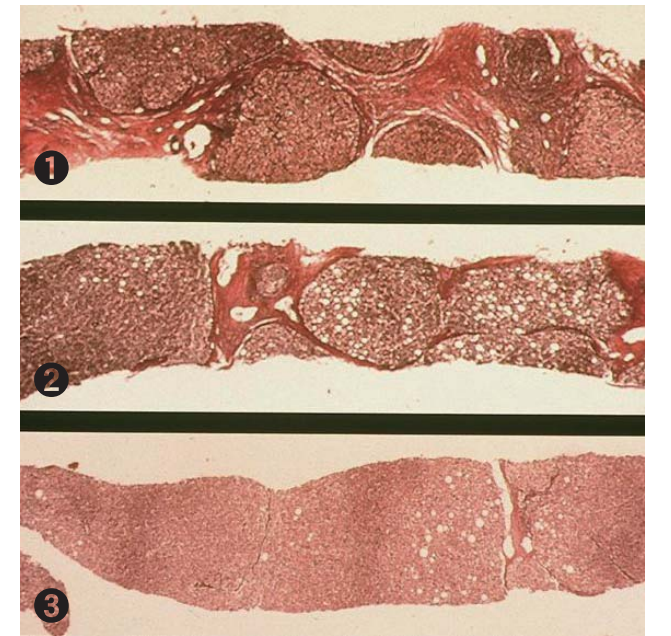
### 肝硬変の治療

①対症療法と②原因療法がある。原因療法が可能ならば第1選択となるが不可能な場合は対症療法となる。近年原因の8割を占める肝炎ウイルス(B型、C型)がわかりその治療法もほぼ確立してきた。原因となるウイルスを排除、または制御することにより持続性の炎症が止まるのである。

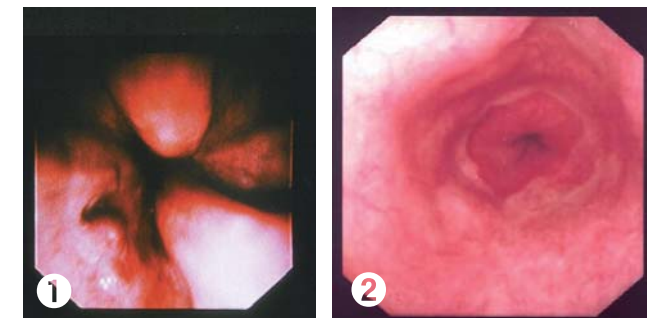
### 肝硬変の可逆性

約30年前までは原因も不明、原因療法も無かったため持続性の炎症を止めることができなかった。近年インターフェロンや核酸アナログの治療が確立して、ウイルスを制御や排除できるようになり、炎症を止めることが可能になった。すると肝細胞の破壊が止まり、肝細胞の再生や線維化の減少が起きる。すなわち肝硬変が正常肝に戻るといった現象が起こる(可逆性)。但し年月がかかる。

大分合同新聞(朝刊)  
2001年12月23日(日曜日)



- ①治療前の肝臓: 完全な結節形成(肝硬変)。
- ②C型肝炎ウイルスがインターフェロンにより消失後、1年3ヶ月目、線維がやや減少している。
- ③ウイルス消失後、3年2ヶ月目、線維が著明に減少。



- ①治療前の食道静脈瘤。
- ②肝炎ウイルス消失後、9年目、完全に静脈瘤は消失。肝硬変が治ったため、静脈瘤は無治療で消失した。

### 私の肝臓病研究

肝硬変が治るといことはとても大きな意義がある。肝不全の予防、肝細胞がんの予防、食道静脈瘤の予防・改善等々で最終的には肝硬変患者さんの予後の延長になる。この肝硬変の治療や可逆性の研究が私の最近20年間の主なものであった。最後になりますが、私は平成24年3月で定年退職になります。長い間「ほけかんだより」を担当してきました。有難うございました。